



# 光受寺通信

R.3年9月1日 発行  
発行元 光受寺  
https://koujyuji.com/

コロナ感染拡大は止まるところを知らず、ますます深刻さを増してまいりました。先月はワクチン接種も進み終息の気配が感じられたものの、ついには岐阜県も緊急事態宣言が発令されるまでになってしまいました。先の見えない状況に不安ばかりがつのります。思えばおよそ2年前、このウイルスが蔓延し始めた頃には誰かが「2~3年は続くでしょうね」と言っていたことを思い出しますが、どうやらその通りになってきたようであります。

さて、これから地球変動による自然災害の問題も抱えながらの私たちの未来には大きな課題が立ち塞がっているようです。今、まさに人間の飽くなき欲望が作り出してきた地球の姿に、緊急事態宣言が発令されていると受け止めるべき時なのです。生きとし生けるものすべてのものが、この地球というグランドにおいて、バランスを取りながら共生していくための、極めて具体的でかつ恒久的な道筋を模索していかなければいけないのです。

地球は人間だけのものではないのです。その自覚と謙虚さを忘れてはならないことを教えてくれるご縁となったのはコロナであり、様々な自然災害であったように思われます。静かに思案を巡らしましょう。地球と私たち人間の未来のために。

## 彼岸を迎えて

—真宗門徒とついでいっしょにはひつこはきんごう。—

一般にお彼岸とは今は亡き人を供養する時とされ、お寺やお墓にお参りする人が多いようです。しかし、親鸞聖人は歎異抄の中では「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もつたること、いまだそうらわす」と言われたと伝えられています。

「父母の孝養」とは、亡き父母に対しての「追善供養」の事を言います。「追善供養」とは生きていた私たちが、亡くなった方が迷いなく良いところに行けますようにと願いを込めて行う勤めです。しかし、はたして自分の事さえも救えない私たち凡夫が他のだれかや、すでに亡くなられた方を救えるものなのでしょうか。

親鸞聖人の言われる「父母」とは、自分に直接つながる限定した「いのち」を言うのではなく、輪廻の中で無数の繋がり合う「いのち」をいうのです。私たち浄土真宗ではすべてを阿彌陀仏にお任せする他力の信心を旨としています。ですから「救いたい」「救われたい」という私たちの思いやはからいを超えて阿彌陀仏の「必ず救う」という願いを信じ、いただく以外に何もないということなのです。

お彼岸には、身近な人の死を「縁」として、私にまで届けられている「いのち」のありがたさ、尊さを改めて確かめていきたいものです。

## 秋季永代経変更のお知らせ

先月号においてお知らせいたしました永代経につきまして、「コロナ感染拡大が一段と深刻さを増してまいりましたので、次のように変更させていただきます」と思っています。よろしくご理解のほどお願いを申し上げます。

日時：九月二十三日(木) 午前のみ 十時～

一般参詣無し  
お斎なし。

住職・役員のみ  
内勤めとします。



※今回の永代経は、「コロナ感染を危惧し、お灯明代は集めていただかないことになりました。またお斎、おさがりの配布いたしませんのでよろしくご理解いただけますようお願い申し上げます。



# 今月の掲示板

**おみがき** 8月2日(月) 「奉仕ありがとうございました。」

お盆を前にしてのお磨きを有志の方によって行いました。朝からムンムンとする暑さの中、尊い「奉仕の思いを寄せていただきました。ただ本堂は天井が高く風通しも良いことから、思ったほどの暑さは感じられなかったのは幸いでした。「仕上げはやっぱり新聞紙やね」「仏具も物によってはずいぶん質感が違ってもんやね」など話に花を咲かせながら約一時間半ほどの作業となりました。



今では仏具に金メッキを施したりして、おみがきの手間も省けることもできるのですが、しかし、こつこつと皆さんが集まっていただき作業していただくことで仏具狂魔の意味もより深まるのではないかと考えています。ですから光受寺ではおみがきも大切なお寺の行事の一つとして考えています。

次回は年末の「おみがき」となります。多くの方のご協力がいただければと思っております。



磨き上げられた仏具

無有代者

—誰も

代わる者なし—

「仏説無量寿経」

聖典 六十頁

生きていくと様々な苦難に遭遇します。どんなにいろいろな出会ったとしても自分に代わってくれる者は誰もいません。

「自分一人で苦しめ」と言われているように、孤独な思いはより一層深まってくるのですが、誰も代わってくれない人生だからこそかけがえのない「縁」となっているのです。

孤独に苦しみ悩んでいるときに「そ、この言葉が「今現在を生きること」という事実を目覚めよ」と呼び掛けているのです。

6回目



## こころの散歩

縄文時代の信仰を想う

縄文時代は1万3千年続いたと言われますが、その生活様式は「狩猟採集」でした。つまり自然の恵みにすがって生きる生き方です。縄文時代は気候が温暖で、豊かな稔りがあり、遺跡が東北地方に残されているのも、当時は温暖な気候だったことを物語っています。縄文人は自然の豊かな恵みに畏敬と感謝の念を深め、宗教的心情を培っていました。

梅原猛氏は「日本の深層」で縄文文化は日本の基礎文化だと言っておられます。一万年という時代の長さからも、自然とのつながりの深さから観ても、日本文化の基層となったことがうかがわれます。文字を持たない時代ながらも、高い精神文化と、芸術性の高い土器にも見られるように優れた技術を持っていました。

弥生時代は稲作が導入されましたが、外来文化であり、日本人の精神的故郷はやはり縄文にさかのぼるのが妥当かと思われれます。



【新】十一 十二回連載 樹林  
宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ  
南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう  
— 問い続ける歩みをともに —

お知らせ

十日講…九月十日(金) 九時半より

一般参詣無しで、役員のみで、執り行います。

学習会・金曜喫茶は中止とさせていただきます。



光受寺御遠忌法要